

# 映画はいいなあ

# 202103

春です。

長い冬眠生活を終えて、少しずつ光が風が、肌に触れる。気持ちがいい。

上映活動もゆっくり始まった。

『奈緒ちゃん』上映以来、ほとんどの私の作品を上映してくれている三重県・伊勢進富座で、『えんとこの歌』ダブル受賞のお祝い上映をやってくれた。

進富座での上映はいつものことながらベストだった。映像も音も最高……。創り手にとって何より嬉しい、至福の時を過ごさせてもらった。「日本一の映画館だ！」と支配人の水野さんに口走ったら、とても嬉しそうだった。

気分を良くしていたら、上映中止の知らせが、ニヶ所から舞い込んだ……。クソ！

悔しい。昨年から何度こんな思いを味わってきただろう。

三寒四温というから、少しずつ少しずつ春になるんだ……

気を取り直して、『えんとこの歌』に続く更なる新作の追い込みで、編集室にこもる。どんな不快なことがあっても、映像に触れていれば気分は回復するんだ。この頃になってつくづく「映画はいいなあ」と思うようになった。

愛おしく思うようになった。

我が父、伊勢長之助は記録映画の編集者だった。末期がんで入院したベッドの上で横になって、最後まで編集を続けていた。あれは、治療行為のひとつ、だったのかもしれない。

その最後の仕事は『森と人との対話』。

PR映画だけど、森の自然と、対話する山仕事をする人々とのかかわりを描いた短編、とても美しい映画だ（撮影・瀬川順一）。父は、最後の最後まで、「映画はいいなあ」と想い続けながら旅立ったに違いない。

本当は、映画に「いい映画」も「悪い映画」もないんだ。評論家たちがそんな風言ってるだけで、無条件に「映画はいい」のだから。映画を愛おしく想う奴にとっては……

私は自主製作で映画を創るようになってから、上映活動にも積極的にかかわるようになったので、上映の場でも「映画はいいなあ」としばしば思う。どんなに小さな上映会でも、どんなにお客さんが少なくても、むしろ少なければ少ないほど、「映画はいいなあ」と思うのだ……

最後の最後まで、映像に触れ続けて、最後の最後まで、上映の場に立ち続けたい。

広島から在来線で一時間ほど内陸に入った山里で、友人が『えんとこの歌』のバリアフリー上映をやってくれた。コロナ禍でピンチが続く、我がいせフィルムを案じて、自主上映の手を挙げてくれたんだ。

ありがたい。

山里の河原にはソメイヨシノ、山にはヤマザクラが、満開だった。

もう一度、「映画はいいなあ」と想った。

伊勢 真一

カントクのつばやき

二〇二一年三月